

錯体物性研究部門

正岡重行（准教授）（2011年2月1日着任）

A-1) 専門領域：錯体化学

A-2) 研究課題：

- a) 多電子酸化還元反応を促進する金属錯体触媒の開発
- b) 金属錯体を対象とした光電気化学的挙動の評価
- c) 金属錯体の規則配列による反応場構築

A-3) 研究活動の概略と主な成果

- a) 鉄や銅などの安価な金属イオンを有する金属錯体を対象に、酸素発生触媒の開発に取り組んだ。その結果、多核構造と隣接基質活性化サイトを併せ持つ鉄錯体を利用することで、高活性な酸素発生触媒を創製できることを見出した。また、電気化学測定、分光化学測定および量子化学計算の結果から、多電子移動反応と結合生成反応がそれぞれ効率よく進行する反応機構が示唆された。
- b) 溶存する金属錯体分子が光吸収に伴って引き起こす電子移動過程を理解するため、照射下で電気化学測定が可能な光電気化学測定システムを開発した。また、開発した測定システムを用いて、光化学的なCO₂還元反応に対して活性を示す種々の金属錯体触媒を対象に光電気化学測定を行い、照射が触媒反応に与える影響を電気化学的に観測した。
- c) 自己集合作用を利用した金属錯体の規則配列と反応場構築を試みた。具体的には、反応活性点と高い対称性(D_{4h})を併せ持つパドルフィール型二核錯体に、分子間アレーン-パーフルオロアレーン相互作用が可能な官能基を導入し、自己集合を促すことで、反応活性点が細孔内に配置された多孔性フレームワークの構築に成功した。また、これらの多孔性フレームワークの物質変換機能についても評価した。

B-1) 学術論文

M. OKAMURA, M. KONDO, R. KUGA, Y. KURASHIGE, T. YANAI, S. HAYAMI, V. K. K. PRANEETH, M. YOSHIDA, K. YONEDA, S. KAWATA and S. MASAOKA, “A Pentanuclear Iron Catalyst Designed for Water Oxidation,” *Nature* **530**, 465–468 (2016).

V. K. K. PRANEETH, M. KONDO, P.-M. WOI, M. OKAMURA and S. MASAOKA, “Electrocatalytic Water Oxidation by a Tetranuclear Copper Complex,” *ChemPlusChem* **81**, 1123–1128 (2016).

K. KITAMOTO, M. OGAWA, G. AJAYAKUMAR, S. MASAOKA, H.-B. KRAATZ and K. SAKAI, “Molecular Photo-Charge-Separators Enabling Single-Pigment-Driven Multi-Electron Transfer and Storage Leading to H₂ Evolution from Water,” *Inorg. Chem. Front.* **3**, 671–680 (2016).

B-3) 総説、著書

M. KONDO and S. MASAOKA, “Water Oxidation Catalysts Constructed by Bio-Relevant First-Row Metal Complexes,” *Chem. Lett.* **45**, 1220–1231 (2016).

B-4) 招待講演

S. MASAOKA, "Molecular Catalysts Designed for Water Oxidation," 8th Asian Biological Inorganic Chemistry Conference (AsBIC8), Auckland (New Zealand), December 2016.

S. MASAOKA, "A Pentanuclear Iron Catalyst Designed for Water Oxidation," 5th International Symposium on Solar Fuels and Solar Cells (5th SFSC), Dalian (China), October 2016.

S. MASAOKA, "Molecular Catalysts Designed for Water Oxidation," Japan-Korea-Taiwan Bioinorganic Chemistry Symposium 2016, Okazaki (Japan), September 2016.

S. MASAOKA, "Molecular Catalysts Designed for Water Oxidation," Challenges for dream catalysis—Design of catalytically active centers from the concept of coordination, 66th JSCC conference, Fukuoka University, Fukuoka (Japan), September 2016.

S. MASAOKA, "A Pentanuclear Iron Catalyst Designed for Water Oxidation," The 1st Japan-Australia Joint Symposium on Coordination Chemistry, Fukuoka University, Fukuoka (Japan), September 2016.

正岡重行, 「植物に学ぶ触媒デザイン: 水から酸素を作る鉄5核錯体」, 第4回バイオ関連化学シンポジウム若手フォーラム, 金沢駅東もてなしドーム地下イベント広場, 金沢, 2016年9月.

正岡重行, 「電子状態の柔軟性が生み出す触媒機能」, 第3回機能化学研究会「構造・電子状態の柔軟性が生み出す新機能」, 猿投温泉, 豊田, 2016年8月.

S. MASAOKA, "Molecular Catalysts Designed for Water Oxidation," 2nd UK-Japan Workshop on Solar Fuels and CO₂ Conversion: British Embassy Tokyo, Tokyo (Japan), June 2016.

S. MASAOKA, "Molecular Catalysts Designed for Water Oxidation," 12th International Workshop on Supramolecular Nanoscience of Chemically Programmed Pigments (SNCP16), Ritsumeikan University, Kusatsu (Japan), June 2016.

S. MASAOKA, "Molecular Catalysts Designed for Water Oxidation," The 21st iCeMS International Symposium "Emerging Science for Unlocking Cell's Secrets," iCeMS Main Building, Kyoto University, Kyoto (Japan), June 2016.

S. MASAOKA, "A Pentanuclear Iron Catalyst Designed for Water Oxidation," The 2nd International Symposium on Chemical Energy Conversion Processes (ISCECP-2), Kyushu University, Fukuoka (Japan), May 2016.

正岡重行, 「金属錯体を触媒とする酸素発生反応」, 第9回中国四国地区錯体化学研究会(錯体化学若手の会中国四国支部第1回勉強会), 関西学院大学, 2016年5月.

正岡重行, 「金属錯体を触媒とする多電子酸化還元反応」, 第3回応用化学談話会, 東京大学, 東京, 2016年4月.

S. MASAOKA, "Molecular Catalysts Designed for Water Oxidation," Asian International Symposium—Coordination Chemistry, Organometallic Chemistry—, Doshisha University, Kyotanabe (Japan), March 2016.

正岡重行, 「低温度星まわりの生命居住可能惑星において起こり得る光合成反応の分子科学的考察」, 第4回宇宙と生命ワークショップ, 一橋大学一橋講堂, 東京, 2016年3月.

S. MASAOKA, "Molecular Catalysts Designed for Water Oxidation," The 4th Frontier Chemistry Center International Symposium "Future Dreams in Chemical Science and Technology: Bridges to Global Innovations," Hokkaido University, Sapporo, February 2016.

正岡重行, 「金属錯体を触媒とする多電子酸化還元反応」, 第8回東北大学研究会プログラム「金属錯体の固体物性最前線——金属錯体と固体物性物理と生物物性の連携新領域を目指して——」, 東北大学, 仙台, 2016年2月.

正岡重行,「人工光合成を志向した金属錯体の化学」,ABC ミニワークショップ「極限環境の光合成」,立川グランドホテル,東京,2016年2月.

S. MASAOKA, “Molecular Catalysts Designed for Water Oxidation,” Symposium on Hierarchy and Holism in Natural Sciences, National Astronomical Observatory of Japan, Mitaka, February 2016.

正岡重行,「鉄五核触媒の分子構造制御に基づく低過電圧酸素発生」,新学術領域「人工光合成」第4回公開シンポジウム,東京理科大学,東京,2016年1月.

B-6) 受賞,表彰

榎本孝文, Dalton Transactions Prize (2016).

榎本孝文, 錯体化学会第66回討論会ポスター賞 (2016).

榎本孝文, 日本化学会東海支部長賞 (2016).

S. K. LEE, The Winter School of Asian-Core Program, Poster Award (2016).

榎本孝文, 第27回配位化合物の光化学討論会ポスター賞 (2015).

榎本孝文, 2015年度総研大物理科学学生セミナー Adobe 賞 (2015).

榎本孝文, 伊豆 仁, 深津亜里紗, 2015年度総研大物理科学学生セミナー優秀発表賞 (2015).

深津亜里紗, International Conference on Artificial Photosynthesis (ICARP2014), Excellent Poster Award (2014).

伊豆 仁, 第4回CSJ 化学フェスタ2014 優秀ポスター発表賞 (2014).

伊東貴宏, CrystEngComm Poster Prize (2014).

伊東貴宏, 錯体化学会第64回討論会ポスター賞 (2014).

岡村将也, 錯体化学会第63回討論会学生講演賞 (2013).

中村 豪, 平成25年度(第4回)総合研究大学院大学学長賞 (2013).

吉田将己, 第2回CSJ 化学フェスタ2012 優秀ポスター賞 (2012).

中村 豪, 第2回CSJ 化学フェスタ2012 優秀ポスター賞 (2012).

岡村将也, 第2回CSJ 化学フェスタ2012 優秀ポスター賞 (2012).

村瀬雅和, 第2回CSJ 化学フェスタ2012 優秀ポスター賞 (2012).

近藤美欧, 第5回資生堂女性研究者サイエンスグラント (2012).

正岡重行, 若い世代の特別講演会講演賞 (2011).

正岡重行, 第53回錯体化学討論会ポスター賞 (2003).

正岡重行, 日本化学会第83回春季年会学生講演賞 (2003).

B-7) 学会および社会的活動

学協会役員等

錯体化学会副事務局長 (2015-).

錯体化学会理事 (2015-).

錯体化学会ホームページ委員 (2013-).

錯体化学会若手部会九州支部世話人 (2006-2010).

錯体化学会若手部会事務局 (2006).

学会の組織委員等

日本化学会第5回CSJ 化学フェスタ実行委員 (2015).

総研大アジア冬の学校2013主催 (2013).

錯体化学若手の会夏の学校2008主催 (2008).

分子情報科学若手セミナー主催 (2006).

学会誌編集委員

Scientific Reports, Nature Publishing Group, Editorial Board (2015-).

日本化学会「化学と工業」編集委員 (2013-).

B-8) 大学での講義, 客員

名城大学理工学部, 非常勤講師, 「錯体化学」, 2016年度後期.

名古屋大学大学院理学研究科, 客員准教授, 2013年4月-.

B-9) 学位授与

岡村将也, 「Development of New Transition Metal Complexes Designed for Water Oxidation」, 2016年3月, 博士(理学).

B-10) 競争的資金

科研費基盤研究(B), 「クラスター錯体によるエネルギーキャリアのテーラーメイド合成」, 正岡重行 (2016年-2018年).

科研費研究活動スタート支援, 「多核錯体への柔軟なプロトン移動能の導入と水の酸化反応への影響」, 岡村将也 (2016年-2017年).

科研費新学術領域(公募研究), 「鉄五核触媒の分子構造制御に基づく低過電圧酸素発生」, 正岡重行 (2015年-2016年).

科研費若手研究(A), 「反応性超分子フレームワーク: 反応場の構築と反応の可視化」, 近藤美欧 (2015年-2018年).

自然科学研究機構若手研究者による分野間連携研究プロジェクト, 「光合成モジュールの人為的再構成によるサイボーグ植物の創出」, 正岡重行 (2015年).

自然科学研究機構新分野創成センター宇宙における生命研究分野プロジェクト, 「低温度星まわりの生命居住可能惑星において起こり得る光合成反応の分子科学的考察」, 正岡重行 (2015年).

科研費挑戦的萌芽研究, 「異種金属多核錯体による革新的電気化学物質変換」, 正岡重行 (2014年-2016年).

自然科学研究機構若手研究者による分野間連携研究プロジェクト, 「酸素発生型光合成への挑戦: 機構理解と新機能創出」, 正岡重行 (2014年).

科研費若手研究(A), 「配位不飽和な自己集合性多核錯体を触媒とする多電子酸化還元反応」, 正岡重行 (2013年-2015年).

科研費新学術領域(公募研究), 「水の酸化の超高効率化を目指した超分子錯体触媒の創製」, 正岡重行 (2013年-2014年).

自然科学研究機構若手研究者による分野間連携研究プロジェクト, 「酸素発生型光合成への挑戦: 機構理解と新機能創出」, 正岡重行 (2013年).

科学技術振興機構先導的物質変換領域, 「超分子クラスター触媒による水を電子源としたCO₂還元反応系の構築」, 近藤美欧 (2012年-2017年).

科研費挑戦的萌芽研究, 「二次元反応場への金属錯体集積と水を基質とする革新的多電子物質変換」, 正岡重行 (2012年-2013年).

科研費若手研究(B),「高効率触媒界面の構築を目指した錯体プラットフォームの開発」, 近藤美欧 (2012年–2013年).

第5回資生堂女性研究者サイエンスグラント,「界面電子移動プログラミングによる水の完全光分解系の構築」, 近藤美欧 (2012年–2013年).

学融合推進センター公募研究事業事業枠③女性研究者支援,「界面電子移動反応を利用した水の完全光分解システムの創成」, 近藤美欧 (2012年).

科学技術振興機構さきかけ研究「光エネルギーと物質変換」領域,「水の可視光完全分解を可能にする高活性酸素発生触媒の創製」, 正岡重行 (2009年–2012年).

科研費若手研究(B),「水の分解反応に対する非貴金属系高活性金属錯体触媒の創製」, 正岡重行 (2009年–2010年).

科学技術振興機構重点地域研究開発推進プログラム「シーズ発掘試験A (発掘型)」,「有機–無機複合型超高活性酸素発生錯体触媒の創製」, 正岡重行 (2009年).

九州大学教育研究プログラム・研究拠点形成プロジェクト,「混合原子価2核錯体を用いた量子セルオートマトン材料の開発」, 正岡重行 (2009年).

(財)鉄鋼業環境保全技術開発基金第29回環境助成研究,「鉄–硫黄系金属錯体を用いた安価高活性水素発生触媒の創成」, 正岡重行 (2008年–2009年).

(財)日産科学振興財団環境研究助成,「水の完全光分解を実現可能とする高活性酸素発生触媒の創成」, 正岡重行 (2008年).

科研費若手研究(B),「高度に組織化された球状水素発生触媒の創製」, 正岡重行 (2006年–2007年).

B-11) 産学連携

ライオン(株)研究開発本部寄付金,「金属錯体系電子移動反応触媒研究の発展を奨励する研究費」, 正岡重行 (2016年).

C) 研究活動の課題と展望

我々の研究グループでは、太陽光エネルギーを貯蔵可能な化学エネルギーに変換できる次世代科学技術「人工光合成」の達成に向けて、金属錯体を対象とした基礎研究を進めている。2016年は、a) 多電子酸化還元反応を促進する金属錯体触媒の開発、b) 金属錯体を対象とした光電気化学的挙動の評価、c) 金属錯体の規則配列による反応場構築、を並行して推進し、それぞれ重要な研究成果を得ることができた。今後は、a) に関しては、水の四電子酸化反応に対する触媒機能の向上(反応速度上昇、過電圧低下等)に加え、多電子還元反応(CO₂還元、N₂還元等)に対する触媒の開発にも取り組みたい。b) では、我々が開発した光電気化学測定システムをより多様な光電子移動系、光触媒反応系に展開したいと考えている。c) では、2016年までに構築した反応性フレームワークの触媒機能評価を行い、特異な反応場が触媒機能に与える影響を調査する。以上の研究を推進し、錯体型人工光合成システムの創出に向けた学術基盤を確立したい。